

プロテスタント教会には、あまりなじみがありませんが、イコンについて知られていることを二、三、お話ししたいと思います。イコンは東方の教会で、描かれる聖なる画なのです。これは偶像崇拜であると破壊されたりするなど悲しい歴史がありますが、イコンを拝む画そのものを崇拜するのではなく、原像であるキリストを崇拜するのです。最近ではテゼー共同体の礼拝にも備えられていることから、プロテスタント教会でも大切にされるようになってきました。

このイコンを制作するのは、修煉と祈りの道を旅する修道の道であり、この世のかかわりと肉の欲から解放されて、ひたすら神との一致を求める作業だといえます。だからイコンには描く人の個性を出すことなくひたすら原像どおりに描くことが求められるのです。つまりキリストとの一致を求めるために、自己を放棄することが求められるといえます。

ちなみに日本人ではじめてイコン画家になったひとは山下りんといっぴとよ…

常陸国笠間藩（茨城県笠間市）の出身。1873年（明治6年）に江戸に出て豊原国周という浮世絵師に学び、後に川上冬崖に洋画を学んだ中丸精十郎に師事する。1877年（明治10年）には工部美術学校に入学し、アントニオ・フォンタネージの指導を受けた。同窓生の山室政子の影響で正教会に改宗した。工部美術学校は1880年

（明治13年）に退学する。同年、山室の代役で教会より派遣され聖像画家として修養すべく帝政ロシアの首都サンクトペテルブルクに留学した。ビザンチン式の聖像の技法を山下自身は好まず、ロシア滞在中に記した日記に「イコンはおぼけ絵」「イタリヤ画（ラファエロが描いたような絵）が画きたい」などの発言を残している。滞在中は女子修道院でイコン製作技術を学び、本当は5年滞在のところを丸2年滞在して1888年（明治16年）に帰国した。…中略…イリナ山下のイコンは全て模写であり無署名である。この点において、正教のイコンの原則を忠実に守っている。ロシア留学からの帰国後は、留学経験を誇る風もなく、機関紙である『正教時報』に留学体験を書くこともなく、肖像写真にも土産にもらったワンピースを着ることもなく粗末な木綿の着物で写り、教会内で自立した自己主張もせず、ただただイコン制作のみに努めた。当時の女子神学生の証言として、周囲とは全く没交渉で、浴室で稀に会った程度であり、アトリエすらも見た者は居なかったというものがある。「ウィキペディア」より）

この記述によれば、山下りんは、神と完全に一致するほかに、自分を棄てる修道の道を歩もつとしていたように思われます。しかし山下りんについては異論もあります。

りんはロシアに留学し修道院でイコンを描く修道の道を強制されますが、それがいやで5年の予定を2年に満たず戻ってくるのです。彼女は帰国後しばらくイコンを描くことをやめるのです。しかししばらくして再びイコンを描きはじめます。ただそのイコンが伝統に従ったものではなく、ふくよかなマリアなど個性豊かに描いているのです。

いったいどちらが山下りんについて真実を言い表しているのか、苦慮します。

この問題は山下りんの絵画に限った話ではなく、自分という存在を捨て去り神に帰依するのか、神に存在を認められた者として思つ存分に自らを表現するのかという問いでもあります。イコンについていうならば、なぜ伝統的なイコンは柔らかかみもなく強面になっているのか、りんのイコンは柔らかかみがあつてふくよかで好感をもてるものか、はたしてイエスという方はどんな表情だったのかという問いが沸き起こります。

今日の聖書箇所では、イコンの原像であるイエスは、神に対してご自分を完全に一致するほどに向き合っておられることをつかがい知ることが出来ます。…「19はつきり言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。」イエスは神がなさるとおりに、死者を復活させていのちを与えるように、イエス自らもいのちを与えるのです。

しかしひとつだけ父なる神とイエスとの間に違いがあります。（22節）「父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せられておられる」のです。

19そこで、イエスは彼らに言われた。「はつきり言うておく。子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。20父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。

また、これらのことよりも大きな業を子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。21すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。22また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。23すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子を敬わない者は、子をお遣わしになった父をも敬わない。

申 25・1 二人の間に争いが生じ、彼らが法廷に出頭するならば、正しい者を無罪とし、悪い者を有罪とする判決が下され（裁かれ）ねばならない。

イエスの言葉を聞いて神を信じる者は、善悪の戒めによって、有罪の宣告を受けることなく、永遠のいのちを与えられると言われるのです。さらに有罪宣告を受けて死に定められた者さえもイエスの声を聞く時が到来する、それが今である。その声を聞いた者は生きるのです。つまり過去に遡って罪が赦されるといっています。

すべての過去は、かつて今でした。すべての未来もいずれ今になります。そしてこの今と言いつ時のみがわたしたちに扉を開いているのです。また永遠とは、時間を超越しているので過去に制約されない、また同時に到来していない未来も存在するのです。この永遠に連なることができたらば、少なくとも善悪の戒めによって死に定められるべき過去の罪責もその意味を失う。善悪の戒めにしぼられた過去、善悪の戒めによっていずれしぼられる定めにある未来も、ただ死への呪縛から解放されたいのちへ移るために、ただひとつ必要なことはイエスの声を聞くことのみである、

イエスは言われます。

かつて故郷を捨ててまで画を描くことを志した山下りんは、ロシアのザンクトペテルブルクの修道院に幽閉されたかのような状態で自我を殺してイコンを描くように強制されました。とても五年間を耐えることができずに早々に日本に戻り、イコン以外の画を描く道を探し求めました。

当時のりんの日記には、芸術に素人の修道女が自分の絵を直すことに腹を立てている文章が残されています。やがてエルミタージュ通いも禁止され、りんは半ば軟禁状態でイコンを描かされるようになります。描くことに喜びを感じなくなったりりんは、5年の留学予定をわずか1年半で切り上げロシアを後にしました。帰国後7年間、りんはイコンを描きませんでした。そしてロシア時代に習ったという銅版画に触れたり、歴史画、さらにはワインのビンに貼るラベルをデザインするなど、イコン画家ではなく、一人の洋画家として生きようと懸命に人生を模索していきます。やがてりんは再びイコン画を描き始めます。諦めだったのか、彼女なりに心に折り合いをつけたのか…。その決心を後押ししたのが、「日本の、日本人のためのイコンを描きなさい」というニコライの一言でした。りんは日本各地に建てられる新しいハリストス教会のために次々と精力的にイコンを描き続けます。聖書の物語に馴染んでいない日本人にとって、ふっくらと温かみに溢れた聖母たちの表情は、痩せこけたキリストよりもはるかに親しみやすかったのでしょうか。（キリン・アートミュージアムHPより）

イコンに自己主張をもちこむことは、キリストの伝承に自分ひいては文化を盛り込むこととなります。しかし山下

りんにニコライは「日本の、日本人のためのイコンを描きなさい」と告げました。現在日本正教会に所蔵されている山下りんのイコンは三百をくだらないといわれます。

24はつきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。25はつきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。